

記 入 日 2013 年 1 月 12 日

1. 概 要

実践団体名	立命館大学国際部国際協力学生実行委員会 (CheRits)		
連絡先	※代表者または担当者の連絡先電話番号		
プランタイトル	The Way to Abroad of Disaster Risk Reduction Education		
プランの対象者※1	地域住民、海外 地域青年団	対象とする 災害種別※2	地震 火山噴火

※1 別紙「記入上の留意点」の項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

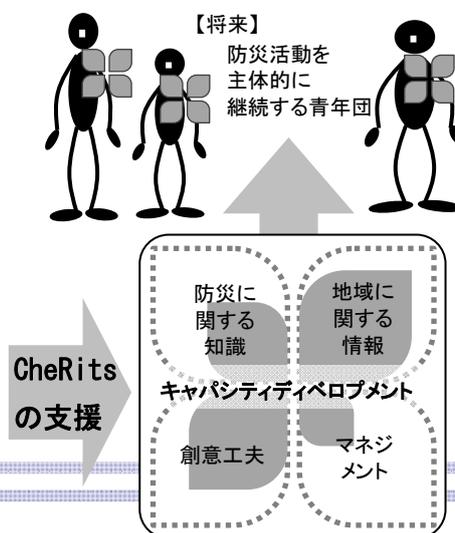
※2 別紙「記入上の留意点」の項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント!】

- ★インドネシアに防災教育を! (→防災教育を海外に!)
- ★日本人が防災教育をするのではなく、現地で防災教育を担う人材を育成します!
- ★CheRitsと地域青年団が対等にその地域に適した防災教育を考えだします!

【プランの概要】

CheRits と地域青年団がともに地域に適した防災教育を考えていく過程で、地域青年団が地域の防災活動を担っていきける人材に必要なと思われる4つの能力を伸ばせるように(キャパシティディベロプメント)、支援をする。4つの能力とは、右図の、1. 防災に関する知識を活かす能力、2. 地域に関する情報を活かす能力、3. (防災活動の内容を) 創意工夫をする能力、4. マネジメント能力である。今回は、地域防災活動の中でも、地域の小学生が災害・防災に関して学べる企画を一緒に考えた。



【期待される効果・ここがおすすめ!】

- ★防災教育(および防災文化)の海外輸出
- ★災害に対して脆弱な途上国における、主にソフト面におけるレジリエンス(災害対応力)の強化
- ★地域ぐるみで防災を考える価値・必要性の逆輸入
- ★国際協力・国際交流の一環



2. プランの年間活動記録 (20 12 年)

	プランの 立案と調整	準備活動	実践活動
4月	3月の現地活動の振り返り、および現在持っている「4つの能力」の評価		
5月		地域青年団と連絡を取り、地域の子どものための防災活動としてやってみたいことを募集	
6月	「4つの能力」のうち、創意工夫の能力をよりアプローチする必要性あり		青年団のやりたいことが避難訓練やレクチャーなどCheRitsがこれまでに実施したものばかりで、「防災活動」に対する変な固定観念があるのではないかと思い、その打開の必要性を感じる
7月	地域青年団の活動が地域で認められることが彼らのインセンティブになると判断	青年団に社会見学という防災活動の枠を提示/地域の大人たちにも協力を要請	
8月			地域青年団(および地域住民)と地域の子どものための防災活動(社会見学)を計画、および下見の実施
9月	8月の現地活動での成果を確認/「創意工夫」と「マネジメント」の重点化		
10月		地域青年団および大人と連絡を取り、現段階でどのようなことを考えているか確認	
11月		募集人数・参加費の概数が提案され、グループ行動案が提案される	
12月		噴火被災地への訪問と、そこでの専門家の解説が小学校の先生から提案される	
1月	地域青年団が考えるべき工夫点を挙げ、地域青年団に提案することを考える		
2月		より具体的な、子どもが楽しめるための工夫を準備していく予定	
3月			子どものための防災活動(社会見学)の実施と、この一年の振り返りをする予定。

3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号： 1】※3

タイトル	子どもの防災学習社会見学のための準備
実施月日（曜日）	2012年8月5日（日）～8月9日（木）
実施場所	インドネシア・ジョグジャカルタ特別州、カラキジョ地区
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名： 所属・役職等：
所要時間または「コマ数×単位時間」	約3時間/日×5日
プログラムのカテゴリ、形式※4	ワークショップ、校外施設見学
活動目的※5	地域青年団の4つの能力の向上
達成目標	2013年3月に子どもを防災学習社会見学に引率する準備をする
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	子どものための防災活動として避難訓練や座学ではなく、社会見学という手法を用いることに合意 →社会見学先を「ムラビ火山博物館」にすることに合意 →子どもを引率する際の注意点や、施設をうまく利用して子どもに楽しく防災を学んでもらうために必要な工夫を考えるための下見 →下見でわかったこと、今後準備が必要なことの確認
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	協力者：インドネシア・ガジヤマダ大学の学生 地域婦人会メンバー 当該地域の小学校の先生たち 道具：話し合いの議事を取るための模造紙 参加者が話し合いの内容を記録するためのノート
参加人数	のべ30人
経費の総額・内訳概要	交通費・宿泊費＝8万円、会場費＝0.5万円
成果と課題	【成果】 ●博物館の展示内容はそのままでは子どもに理解が難しいものが多く、何かしらの工夫をしなければならぬことを、地域青年団および地域の大人が実感した。 ●子どもを迷子にさせないために必要な配慮なども考えられた。 【課題】 ●下見および話し合いで得たものを3月にうまく生かしていく。
成果物	

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： _____】 ※3

タイトル	
実施月日（曜日）	
実施場所	
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名： 所属・役職等：
所要時間または 「コマ数×単位時間」	
プログラムの カテゴリ、形式※4	
活動目的※5	
達成目標	
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	
参加人数	
経費の総額・内訳概要	
成果と課題	【成果】 【課題】
成果物	

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： _____】 ※3

タイトル	
実施月日（曜日）	
実施場所	
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名： 所属・役職等：
所要時間または 「コマ数×単位時間」	
プログラムの カテゴリ、形式※4	
活動目的※5	
達成目標	
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	
参加人数	
経費の総額・内訳概要	
成果と課題	【成果】 【課題】
成果物	

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の項目から1つ選択し、記入してください。



4. 苦勞した点・工夫した点

<p>プランの立案 と調整で 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>地域青年団を地域の防災活動を担っていくことができる人材に育成していくことが主眼のプランである。これは、外部者であるCheRitsがいなくなっても彼ら自身で彼らの地域の防災活動を継続してもらい、当該地域のレジリエンスを向上させるためである。</p> <p>このような人材に必要な能力（とくに防災活動の視点で）を考えると、2011年度の防災教育チャレンジプラン最終報告会での各プランの重要な要素を抽出すると、4つ（1. 防災に関する知識を活かす能力、2. 地域に関する情報を活かす能力、3. 創意工夫をする能力、4. マネジメント能力）に分けられると考え、それらの要素を青年団が備えられるようにアプローチしていくこととした。</p> <p>これらが当プランの工夫点であると同時に、苦勞している点である。というのも、自分たちが防災教育をすればいいのではなく、青年団自身がこのプロセスを通じて成長していくことを意識しなければならないからである。また、青年団が地区に既存の組織であることを考慮すると、地区の中で普段の役割もある上に、さらに防災活動という役割を増やすことになるため、その役割を担う重要性や意義を理解してもらい、その役割を担うことに前向きになってもらうような努力もこちら側はしなくてはならない。</p> <p>地域青年団に既存の役割に付加して防災活動を担ってもらうためには、地域の理解（地域のほかの組織の理解）が不可欠であることが、プラン開始直後にわかってきた。よって、地域の大人たち（小学校の先生や婦人会）にも協力を仰ぐこととした。</p>
<p>準備活動で 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>CheRitsが学生団体であるため、現地に赴いて直接アプローチできるのは長期休暇くらいである。よって、CheRitsが日本にいる間のコミュニケーションは多少手間のかかるものになる。</p> <p>CheRitsには現地カウンターパートであるインドネシア・ガジャマダ大学の学生団体（日本語）がいる。CheRitsがインドネシアで活動を始めて以来の付き合いで、CheRitsが考える企画をよりインドネシアの文化や慣習に即した文脈に落とし込んだり、よりよくするためにアイディアを出してもらったりと、単なる通訳以上に重要なつなぎ役である。</p> <p>このキャパシティディベロップメント（人材育成）はプロセスが大事であるため、CheRitsが現地にいるときの地域青年団や大人の様子がわかれば十分というものではない。よって、これまで以上に、ガジャマダ大学の学生には何度か当該地区へ足を運んでもらい、地域青年団やほかの大人たちがどんな雰囲気では何を考え、どんなことを意識しているのかなど、CheRitsが現地にいない時に進む議論の結果のみならず、場の雰囲気など感じたこともCheRitsに伝えてもらうようお願いをした。</p> <p>このように、物理的な距離を隔てた状況確認に苦勞したと同時に、これまでに築いてきたガジャマダ大学の学生との協力体制によりこの苦勞を乗り切れるよう、現状把握の方法を工夫した。</p>
<p>実践に 当たって 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>地域の青年団との当プランに地域の大人たちを加えたことによって、多少苦勞が増えたのも事実である。</p> <p>普段、地域の青年団と地域婦人会と一緒に地区のためのイベントをしたり地域活動をしたりすることはほとんどない。ましてや小学校の先生とはなおさらである。よって、この普段ではありえない体制で行う理由やその意義を理解してもらうために、CheRitsとそれぞれの地域の組織との話し合いの時間を長く設けることとした。</p> <p>また、大人の前で若者（青年団）が対等な立場で意見を出すことはほとんどないため、青年団の意見を当プランに反映させられるよう、話し合いの場でのCheRitsおよびガジャマダ大学の学生団体のファシリテーションによって彼らの意見を引き出せるよう工夫をした。と同時に、この場でいろいろ考え意見することは青年団の成長につながるということを大人に理解してもらうよう努めた。</p>

5. 他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・ 同窓会組織	SD Muhammadiyah Kalakijo (当該地域の小学校/カラキジョ・ムハマ ディヤ小学校) *当小学校児童の7割が当該地区の子ど も	地域の子どもを安全に 引率し、彼らが楽しく学 べる工夫に関してアイ ディアを提示する
	Universitas Gadjah Mada (インドネシア・ガジャマダ大学)	CheRits と当該地域のつ なぎ役(異なる文化・慣 習・宗教・価値観などの 橋渡し、CheRits が現地 不在の際の地域との連 絡役)
保護者・ PTAの組織		
地域組織	地域青年団 *地域の高校生および同等の年代の社会 人以上の未婚の男女によって組織される	当プランがアプローチ する対象。(地域の防災 活動を担う人材に育成 したい)
	PKK (地域婦人会) *地域の既婚女性で組織される	青年団の活動を地域の 活動として認識し、その 活動が地域の子どもに とってより有意義にな るよう意見を出す
国・地方公共団体・ 公共施設	Museum Gunung Api Merapi (ムラピ火山博物館)	ムラピ火山の噴火の歴 史や火山分布・火山形成 などの科学的一般知識、 火山噴火監視システム、 火山にまつわる神話、火 山噴火の際の避難方法 などが展示されており、 子どもが学外で学習す る教材として利用する
企業・ 産業関連の組合等		
ボランティア団体・ NPO法人・NGO 等		
職業、職能団体・ 学術組織、学会等		



6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

<p>成果として 得たこと</p>	<ul style="list-style-type: none"> ★今後も一緒に地域の防災を考えてくれるであろう地域青年団が数名見つけた ★4つの能力のそれぞれにアプローチし、各々を少しずつ伸ばし始めることができた ★地域の組織である青年団が始めようとしている活動を地域の人々にも知ってもらい、その価値を認めてもらうために、地域の小学生のための防災活動を考える場に、地域の小学校の先生および婦人会のメンバーにも参加してもらった。これにより、 <ul style="list-style-type: none"> ☆大人が青年団の足りない能力を補うことができた。 ☆地域の違う立場の人々が一堂に会し地域の防災を考えることが、その地域の多様性に適した防災を考えていくのに不可欠であることが明らかになった。 ☆地域の様々な人が一堂に会せるような関係性自体、地域防災には不可欠だとわかった。
<p>全体の反省・ 感想・課題</p>	<p>地域のつながりが強く、独立記念日など年に数回地域ぐるみでイベントを行なっているだけに、そこに加えて防災活動に時間と労力を割く意義をしっかりとわかってもらう努力が、青年団が持続的に防災活動を担っていくには不可欠である。</p> <p>また、当プランのはじめのころは、防災活動といえば避難訓練、もしくは災害のメカニズムを教えること、という青年団のイメージが非常に強かったことを考慮すると、避難訓練を定期的にするだけなど、防災活動が形骸化することのないようにアプローチしていかなくてはならない。“地域に必要な防災（発災時の対応方法や災害に強い社会づくりなど）を考えること”自体を継続してもらうにはまだまだ時間がかかりそうであるし、地域のいろんな努力やつながりが、広く防災につながるということも、時間をかけて理解してもらう必要があると考える。</p>
<p>今後の 継続予定</p>	<p>3月には、またインドネシアに渡航し、実際に青年団および地域の人たちと考えた、地域の小学生のための防災活動を実施する。（ムラピ火山の博物館見学と、ムラピ火山山腹の被災地視察の予定）</p> <p>いまのところ、大まかな募集人数および参加費が提案されており、子どもの迷子防止およびそれぞれの子どもの学びを促進するためにグループ行動をする案が出てきているほか、博物館だけではなく、被災後村の移転によって手が加えられていない被災地の視察も計画されている。小学校の先生からはこの被災地視察で専門家による当時の説明が提案されているが、これには内容の難易度なども含め、まだ議論の余地がある。CheRitsとしては、グループ行動の際に青年団が各グループのグループリーダーとなり、そのグループの子どもたちが楽しめるよう、見学先や移動中にゲームを考えるなどの工夫ができるのではないかと考えている。</p> <p>人の意識を変え、かつ主体的に活動を行なっていく気になってもらい、それに必要な能力を向上し、継続して活動を行なってもらうようになるには、大いに時間を要する。よって辛抱強く青年団の成長をみながら、防災活動を担う人材になるよう、今後もフォローアップしていく予定である。</p>

7. 自由記述欄 ※6

※6 自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守をお願いします。

<海外で防災活動を普及させる際の提案>

支援者（この場合の CheRits）と対象者（この場合の地域青年団および地域住民）のほかに現地カウンターパート（この場合のガジヤマダ大学の学生）を設けること。



現地カウンターパートの役割の重要性：

a. 関係性を三角にする

支援者と対象者の関係においては、どうしても支援-被支援という上下関係ができてしまう。とくに防災教育の文脈では、教える-教わるという関係ではなく対等に学ぶことの必要性が言われていると思うが、これを考慮しても、上下関係を打開する必要がある。とくに国際貢献の場においては、日本は防災に優れた国だというイメージが強く、余計に上下関係が形成されがちであるが、日本から紹介できるのは一般論に過ぎず、対象者自身が知っている地域の情報や状態にうまくリンクできて初めて価値が発生するのである。以上を考慮し、この関係性の打開策として、カウンターパートを第3極に据えることが重要であると考えられる。このカウンターパートは支援側に非常に近い存在であっては意味がなく、支援者の文脈も理解し、かつ対象者の意見も理解し、それをうまくつなげることのできる独立した存在である必要がある。適当なカウンターパートを見つけ、信頼関係を築くことが第一歩ともいえる。

b. さまざまな面での橋渡し役

インドネシアに関していうと、イスラム教的文化およびジャワ文化・慣習、村独特の関係性など、多くの日本との違いがある。これはインドネシア以外にも言えることであろう。このような違いは外部の人間には見えるようで見えない。よって、より対象地域に近い視点でものを見ることができ、対象者以外の存在による橋渡しが、非常に重要である。また言語の面でも、対象者が日常的に使っている言語を理解できる存在が必要である。

(自由記述: 1/3)

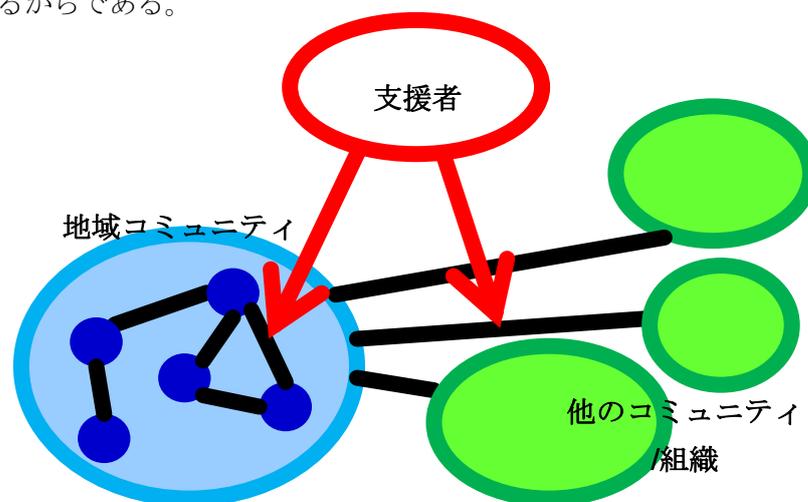
<インドネシアから学べること>

地域のつながり、および地域外とのつながり（どちらもソーシャルキャピタル（社会関係資本）と呼ばれる）が大切であり、それを促進・活用できるような地域防災の在り方を外部者がともに模索することが必要である。

阪神淡路大震災の際、7割の人々が自助・共助によって生きながらえることができたというのは、よく知られた話である。この共助について、普段の地域のつながりが強いほうがより有益に作用するのではないかと、社会関係資本（社会構造に埋め込まれ、行為者の目的的行為によってアクセスされる資本/具体的には信頼・規範・ネットワークなど）との関連の中で研究されている。また、地域内のみならず地域と外の関係の中にある社会関係資本も、より満足できる復興および災害に強いまちづくりには必要であるという研究もある。そして、この社会関係資本とレジリエンス（災害対応能力/ハザードに潜在的にさらされたシステム、コミュニティ、あるいは社会が、機能や構造を許容できる段階に到達または維持するために、抵抗・変化することにより適応する能力）の関係も研究されている。

当プランを実施した地域では、地域のつながりが強く、地域外とのつながりも生かして2006年の地震のあと復旧・復興をしてきた。イスラム教の断食明けのお祭りや独立記念日には必ず地域のイベントを開催しており、そのために地域住民からカンパを集めているし、ゴトン・ロヨン（相互扶助）という文化によって、地域全体のために必要なこと（主に施設）のためにお金や労力を出し合って協力するなど、普段の地域のつながりの強さを物語っている。

このようなつながりを、特に災害予防の時に活用できるように（災害発生時のみならず、防災活動をするときなど）、外部者が働きかけていくことが必要だと考える。というのも、今回青年団と地域の大人が協力するなど、外部者の働きかけがなければ不可能であったことなどが可能になったり、本人たちが気づいていないものを外部者の視点から発見することができたりするからである。



(自由記述: 2/3)

A large empty rectangular box with a blue border, intended for free text input.

(自由記述: 3/3)